1月13日(木)

サンデルが言うところの議論とはどのようなものか～共同体の責任に関連して

作成者：想田 瑞恵

増田さん(以下M)：一昨日の読売新聞に、サンデルがコラムを書いていました。議論を強調しているのは相変わらずでしたが、その議論は、檜垣先生の言う対話に近いような印象を受けました。

檜垣先生(以下H)：確かに、極めて似ていると思います。それどころか、具体的な話し合いや日常の実践的な場面では、サンデルの言う議論のほうが有効かも、と思ってしまうくらい、サンデルとアリストテレスに説得されています。ただ両者には違いがありますね。サンデル的な議論は、「人間には共通のところがある」ということを重視しています。その上で、人の違いを見失ってはいけないけれど、共通性を見出していこうというもの。それに対して、僕の言う対話は、というより中島さんの対話は、人がいかに違うかを分かり合え、というもの。言葉の上での合意はいくらでもできるし、もちろんそれを目指さないといけないが、合意しても、そこに到る人の考え方は違う、分かり合えないということの思い知るようなものなんですよね。両者には、そういう違いがあると思います。

想田(以下S)：サンデルは、共同体を前提した上での議論を強調していますが、本当に対話的な意味での議論をするのなら、共同体ではなく、個人の尊厳を前提しないといけないのではないのでしょうか。対話的議論とは、つまり、空気を読み、多数派という共同体に沿う意見を無言の圧力で強制することなく、誰の意見も独立で対等で同価値を持っているということです。誰のどんな意見も何らかの意味で真理を含んでいると考えるから、意見を対等に聞き、共通なものを見出そうとするのだと思います。そして、そうした対話は、個人の尊厳が前提されていないと不可能でしょう。

H：筋は通っていますね。サンデルはコミュニティを前提して個人を考えているけれど、コミュニティに先んじて個人の尊厳を考えていないと、そもそも「対等」な議論ができないだろうということですね。「対等」の意味が問題になりそうです。

M：想田さんの意見を、もう少し説明してもらっていいですか。

S：話し合いで共通のものを見出そうとするためには、増田さんの意見も私の意見も、対等でなくてはいけません。増田さんも私も、心底、納得している意見が共通のものです。これは、個人に尊厳を認めていないとありえないと思います。

栗原さん：「議論をするには尊厳が必要」というのはその通りでしょう。「こいつには尊厳がないから、こいつの意見は無視しよう」とはならないわけですから。ただ、サンデルのように共同体を前提していても、個人に尊厳はあります。というより、個人の尊厳は、それより大きな共同体によって支えられてあるものなのではないでしょうか。

H：「尊厳」ということの捉え方が違うのでしょうかね。

S：私は、共同体に与えられた役割を果たすことで得られるような尊厳は、個人の尊厳ではないと思います。適切な例かはわかりませんが、筑波大学の今後について、サンデル的に話し合う場を設けたとしましょう。そこでは、学生も教員も事務員も関係なく、意見は対等なものとして扱われます。そのため、個人に尊厳があるようにも思われますが、例えば、その中の一人が、早稲田大学や東京大学やハーバード大学、あるいは大学ですらなく、企業に行ったらどうでしょう。その人の意見は対等なものとして扱われるのでしょうか。私にはそうは思えません。要するに、共同体を前提した個人に与えられた尊厳は、本当に個人の尊厳と言えるのか疑問だということです。

H：でも、言語や環境抜きニュートラルな個人はありえないでしょう。何かを語る際には、必ず背景が必要です。早稲田大学に行っても、「筑波大学生である」ということを背負って語れば、対等に議論ができると思います。

S：確かに、「私が筑波大学生である」ということは、「私が北海道出身である」というのと、同程度の意味しか持たないでしょう。大学受験は、偶然的な要素が排されたものとして扱われているため、大学名には、社会的価値が付いているというだけです。筑波大学の学生であることも、北海道出身であることも、日本人であることも、性別が女であることも、私の背景であるという点では同じこと

です。ですから、「筑波大学生である」ということを背負っていても、対等に議論はできると思います。ですが、こうして「共同体は私の背景にすぎない」と考えられうるのは、個人の尊厳を前提しているからではないでしょうか。

H: サンデルなら、共同体に従属した形でしか、個人の尊厳はないと言うでしょうね。共同体が個人に先立つと考えているわけですから。だから、筑波大学の学生と早稲田大学の学生が対等に議論できるためには、より大きな共同体である「大学生」を想定しないとイケない。最終的には「人間」まで行くような共同体でしょうね。でも、サンデルは、人類という共同体は否定していたんだっただけかな。

S: そうだったと思います。世界市民という考えを否定する論があったような気がします。

H: 確かに、サンデルは、「人間」のような抽象的な共同体ではなく、もっと具体的なものを想定していましたね。国レベルの共同体にも否定的でした。ただ、筑波大学の今後について話すときには、何らかの形で筑波大学に所属したことがあるということが、前提されないといけないでしょう。「筑波大学はなくなったほうがいい」と主張する人もいるかもしれませんが、その意見も、筑波大学に所属していれば、有意義なものとして扱われる。「ある内容が前提されていないと、有意義な議論ができない」ということを、認めるかどうかですね。サンデルは、この前提された内容が目的だと考えたのではないのでしょうか。つまり、意見を内容あるものとするには、自分以外のもの、サンデルにとっては共同体ですね、これが前提されないといけない。日本語を話せないと意見を言うことはできません。日本語は、日本語を話す文化の中で育ち、獲得したものです。誰とも何とも関わらないで意見を述べることはできません。日本語習得のように、自分自身の考えを支える何かがあるはずで、こうしたコミュニタリアンの考えは、ある意味その通りでしょう。ですが、カントの主張には、バウムガルテンの意見が背景がありますが、それはカントの考えの本質を成すものなのか、それとも付随的・機会的なものなのか。ここで区別はできると思います。コミュニタリアンは、内容自体も他者の意見に依存していると考えましたが、カントの考えは違う気がします。確かに、カントが義務として挙げたものは、当時の文化内容に依存したものです。でもこのことは、カントの道徳形而上学が経験的なものであるということの意味しません。つまり、表現としては、所属する文化にあるものを借りるしかなく、その意味で、社会やコミュニティに依存しています。しかし、内容そのものや内容の起源は、あくまで自らの理性によるものだと、カントは考えているでしょう。表現は個々の具体的なコミュニティに依存していても、内容は依存していないということです。表現にとっての前提であって、内容については、アприオリな総合的判断がありうる、と考えれば、カントの思想との整合性もあります。その意味では、アリストテレスの考えも経験的ということになります。目的に気が付くきっかけがコミュニティなわけですから。例えば、想田さんが生きる目的はすでにあるのですが、地域の中で、役割を果たすことを通じて、その目的に気が付く、ということ。具体的なコミュニティである以上、それは偶然的なものであり、経験的です。カントも、言葉にするものは文化の影響を受けざるを得ないということは認めている。しかし、文化に依存しないアприオリな主張があるともしていません。そうした主張があるとすれば、それは理性的なもので、共通性を見出せるようなものことでしょう。

S: 私の考えは、対話をするには、つまり、対等性を確保するためには、個人の尊厳が前提されていることが必要だ、というものでした。今のお話を聞いて、別の理由を思いつきました。各人が背負う共同体が対等だと言うためには、それぞれの共同体を上から眺めないといけない。でもそれは、傲慢というか、越権行為でしょう。なぜなら、必ず人はどこかのコミュニティに属しているからです。それなのに、「私が所属する日本というコミュニティと、ある人が所属するアメリカというコミュニティは対等だ」という、超越的な視点で物事を語ることは、おかしい気がします。そのため、「所属するコミュニティが対等だから、コミュニティを背負う発言も対等で、ゆえに共通性を見出そうとする対話ができる」という論も、成り立ちません。対話の対等性は、共同体以前に成立する必要があるでしょう。このことから、「個人の尊厳が共同体に先立つべきだ」と言えると思います。

H: それも当たっている気がしますね。石田さん、どう考えましたか。

石田さん(以下I):自分が所属する共同体の責任をどう考えるか、ということが、一つ問題になると思いました。共同体が個人に先立つとすると、歴史をずっと背負って発言しなくてはいけないことになる。例えば、ドイツはイスラエルに謝り続けるべきか、という問題ですね。現実に今ドイツに住む人たちが、ユダヤ人に対して何かしたわけではないのに、ということです。

S:石田さんの考えは、その通りだと思えました。確か、小浜逸郎の『なぜ人を殺してはいけないのか』という本で、戦争責任についてそのようなことを言っていた気がします。日本は中国に対して謝罪すべきかという問題について、共同体としては戦争責任はあるが、私個人にはないだろうということです。

H:けれど、個人の責任と共同体の責任を分けて考えることは、本当にできるのでしょうか。個人は必ず共同体に所属しています。それを踏まえなくて、個人を透明な球のような存在として考えると、コミュニタリアンに付け込まれてしまいますよ。

S:確かに私は日本という共同体に所属しています。そして、日本は中国に侵略をしたという歴史を持つ国です。けれど、私は日本人になろうと思って生まれてきたわけではない。中国という共同体に所属する人も、それをねらって生まれたわけではないでしょうから、その意味で、私とその人は対等です。ですから、私が所属する共同体が日本であるということは、私個人と仲良くすることを拒む理性的な理由にはなりません。感情的な理由にはなりうるのが難しいところですが。私は日本という共同体で生活していて、そこでの役割もある以上、何らかの意味での責任はあるでしょう。しかし、その責任はあくまで共同体の一員としてのものであって、私個人のものではありません。それに、先ほど石田さんも言われていましたが、所属する共同体の歴史に対して、個人にも責任があり、そのことを背負って発言しなければいけないのだとしたら、対等に話すことなど不可能ではないでしょうか。

H:戦争責任を問う人は、あなたが言うような個人、ある意味カント的な個人でもありますが、そうした個人を問題にしているのではないと思えます。確かに、人格を前提しないと対話はできないというのはその通りです。ですが、その人格に戦争責任はないと言っても、意味がないでしょう。同様に、「その戦争は過去の話で、今の私には責任がない」や「その戦争は共同体の上位の人間がしたことだから、私には責任がない」と言うのは、ある意味その通りです。ですが、それを言うことには、やはり意味がありません。サンデルの東大での講義でも戦争責任が話題になり、誰にどこまで責任を問うのか、ということが議論になりました。さかのぼろうと思えば、アレクサンダーの遠征までいけますからね。中国への謝罪も、例えば小林よしのりの指摘によると、もう十分なされたということらしいですから。作為的に文句をつけているのだとしたら、不当だと言えるかもしれません。もちろん、この場合も、文句をつけるのは、個人ではなく共同体ですが。いずれにせよ、何を基準にするかということで出された意見に、「相手が納得するまで謝罪する」というのがありましたが、これは真理な気がしますね。

S:あまり納得できていないです。「相手」というのは被害者ですよ。なぜ「加害者である私がもう十分だと納得するまで」では駄目なのでしょうか。

H:それは抽象的な考え方でしょう。例えばあなたが誤って人を殺してしまったとき、遺族への謝罪は、彼らが納得するまで行うはずで、「相手に納得してもらおう」というのは重要な観点でしょう。

S:私個人の責任としては、確かにその通りだと思えます。けれど今、個人と共同体の話が混ざっていませんか。私は、先ほどの「中国への謝罪は、もしかしたらもう十分ではないか」ということについて話していました。この考えは、加害者側の発想ですよ。

H:確かに、「もし反日教育をしているとしたら、そのことに対して文句は言えるのでは」という考えと「相手に納得してもらおうまで責任を取る」という考えは、矛盾しているようですね。この解消のためには、やはり、国家以上に大きい共同体を考える必要があるのでしょうか。そうだとすると、「過去の世代がしたことだから、私に責任がない」という言い方は通らない、とは言えるでしょう。

I:オバマ大統領に、広島を訪れて欲しいと日本人が願うとはどういうことか、と考えてみればいいのではないのでしょうか。政治的意味もあるでしょうが、共同体のメンバーとして謝罪することになるわ

けですから。

H:でも、共同体の長が謝罪するだけでなく、個人として謝ることも必要になる気はしますね。ただし、私利私欲に基づいて、謝罪が不十分だから領土やお金をよこせと言われるのもまた違う。

M:反日教育批判はできるのかという問題でもありますね。日本には、中国が自国民を洗脳していると思えるかもしれない。けれどそれを指摘することは、中国には、日本が中国国民を洗脳しようとしていると取られるかもしれない。何を言っても押し付けということになりかねないでしょう。

H:国より一つ上の原理が必要になってきますね。やはり、不動の動者のようなものを探して、虚心に議論することが大事なのでしょう。「それは反日教育だ」と言うことはできないかもしれないが、情報を開示して、もっと自由に議論しましょう、くらいは言える気がしますね。

S:その通りだと思います。実際に、ドイツとフランスの高校生は、確か、同じ内容の教科書で、歴史を勉強しているはずですよ。

H:力関係は何かしら働くでしょうが、問題をそのまま放っておくのはよくない、ということと言えるでしょうね。